

リスク認識論における実在主義とは何か

——構築主義にとどまらない Ulrich Beck と Bruno Latour の論争を題材にして——

成蹊大学 川端健嗣

1 目的

本報告の目的は Ulrich Beck と Bruno Latour の論争を題材に、リスク認識の実在主義にかかわる考察を提示することにある。

リスクの認識論には構築主義 (constructivism) と実在主義 (realism) の対立がある (Renn 2008: 2)。地球温暖化のような未来予測の「知が不完全」でしかありえないことは「誰もが認めている」 (Yearly 2009: 390)。リスクは未来の損害に関わる概念であり、現時点に存在しない対象の完全な把握は不可能である。それゆえどの損害をいかにして把握するのかというリスク認識は構築を免れない。

リスク認識の構築性は、国際的な協調を引き出せないという意味で政治的問題である (たとえばパリ協定)。他方で上述の観点から学問の認識論として前提とせざるをえない。しかしこれらの構図を前にして、リスクの「実在論 (Realismus)」の立場を決して放棄しない研究者に Ulrich Beck がいる。

Beck のリスク認識論はその「実在主義的」あるいは「客観主義的 (objectivism)」観点において批判されてきた (Alexander 1996: 135) (Elliot 2002) (Lupton 1999) (Mythen 2004)。Beck は 1970 年代に、学問の客観主義論争を引き継いだドイツ実証主義論争の検討を研究の出発点とした。客観主義論争を踏まえた Beck がなぜリスクの「実在主義」や「客観主義」を放棄しないのか。この問いを進めるとき Beck 内在的な学説検討を行う方法と、Beck 外在的な他の論者との比較検討が考えうる。

2 方法

本報告は比較検討の観点から問いを進める。Duke 大学出版の *Common Knowledge* において Beck と Bruno Latour が「実在性のコスモポリタン化」をめぐる争っている。リスク社会論以降 Beck はリスクが国境を越えるとしてその現実(実在)を国民国家を前提としたカテゴリーにとどまらない観点からとらえようとしてきた。グローバルに絡み合うリスク現象の実在は、いまやコスモポリタンの観点においてとらえられねばならない。Latour と Beck のコスモポリタン実在主義をめぐる争いは Beck の実在論の見解の一つの変奏として検討に値する。

3 結果

Beck と Latour の争点はバリャドリッド論争の解釈をめぐる展開している。バリャドリッド論争とは 1550-1 年にスペイン国王が先住民インディオを同じ人間として扱うべきか否かを問うた論争であった。インディオは「文明人」として理解の及ばない対象(リスク)の隠喩である。インディオの扱いは、不可知の対象をいかにして扱うかについての Beck と Latour にとっての試金石となっている。

4 結論

実在主義と構築主義の対立は構築されない対象の存在を前提とする。あらゆるリスク認識が構築を免れないとすれば、実在は構築に対立せず様々な構築が偏在するにすぎない。それぞれの構築の偏在を Latour はコスモスという概念、Beck はコスモポリタンという概念でとらえ、そこに実在を見出している。論争は実在主義概念の意味が構築主義との位置関係の移動により変化したことを示している。

文献
Beck Ulrich, 2004, "THE TRUTH OF OTHERS: A Cosmopolitan Approach," *Common Knowledge*, 10(3): 430-449.

Beck, Ulrich, Patrick Camiller(Translator), 2005, "Neither order nor peace: A response to Bruno Latour," *Common Knowledge* 11(1): 1-7.

Latour, Bruno, 2004, "Whose cosmos, which cosmopolitics? Comments on the peace terms of Ulrich Beck," *Common Knowledge*, 10(3): 450-462.